



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 329号 2011.4.8 発行 社会政策研究所

---

---

1カ月後の震度6強。復興への足取りがくじけそうにもなります。さらに多くの皆さんの支援が必要です。

冒頭の総理大臣及び文部科学大臣からのメッセージの小学校段階の児童用はぜひお読みください。【kobi】

東日本大震災に係る内閣総理大臣及び文部科学大臣からのメッセージ 2011年4月6日  
新学期を迎えるみなさんへ

### 小学校段階の児童用

原文は漢字にふりがながふってあります。

新学期を迎えるみなさんへ

みなさん、入学、進級おめでとうございます。

この4月から、また新しいお友達をたくさん作ってください。

みなさんは、この4月、希望に満ちた春を迎えるはずでした。

しかし、この春は、私たちにとって、とてもつらい春になってしまいました。

ご存じのように、3月11日、あの大地震と津波が日本をおそったのです。みなさんの中にも、ご家族を亡くされたり、あるいはいまでも避難所から学校に通ったりしている人たちがいることでしょう。

避難所の中では、みなさんがお手伝いをしたり、お年寄りや身体の不自由な人を助けて、掃除をしたり、食事の準備をしたりしてくれているという話をたくさん聞きました。本当にありがとうございます。

いま、みなさんは、すべての悲しみや不安から逃れることはできないかもしれません。でも、みなさんは、けっして一人ではありません。どうか、先生やお友達と助け合って、一日も早く、みんなが楽しく安心して学び、遊べる学校を取り戻しましょう。私たちも全力で、みなさんと一緒にがんばります。

災害にあわなかった地域の児童のみなさんにも、お願いがあります。

どうか、みなさんの学校にやってくる、避難してきた仲間たちを温かく迎えてあげてください。すぐ近くに、そういったお友達がいなくても、遠く離れて不自由な生活をしている子どもたち、あるいは、この震災で亡くなり、進学、進級を果たせなかった子どもたちのことも、同じ仲間だと思って、祈りとはげましの声をあげてください。

小さなみなさんも、節電をしたり、おこづかいを貯めて募金をしたりしてくれているという話もたくさん聞きました。そして、私たちはとても誇らしい気持ちになりました。みなさんのその思いやりがあれば、日本はきっと、もっともっと素晴らしい国になって、もう一度立ち上がります。

もっとも被害の大きかった東北地方にも、もうすぐ春が訪れます。

みなさんは、「桜前線」という言葉を、先生からもう習いましたか？ 桜の花が開く日を

線で結んだものです。

日本の国土は縦に細長いために、沖縄では例年1月上旬に開花宣言が行われ、その桜全線は、約半年をかけて、5月の下旬に北海道の北端に到達します。自然がおりなす、素晴らしい命のリレーです。

自然は、今回の地震や津波のように、時に、私たちに厳しい試練を与えます。しかし桜前線のように、私たちをやさしく包んでくれるのも、また自然の力です。

みなさんも、どうか、思いやりのリレーのバトンを、被害を受けた地域の仲間に向けてください。電車の中でお年寄りに席を譲ること、身体の不自由な方たちの手助けをすること。そうした身近な人への思いやりが、きっと少しずつ広がって、桜全線と一緒に、被災地に届くことでしょう。

この思いやりのバトンは、世界中からも届けられました。世界中から、救助の人が来てくれたり、支援の品が届けられました。みなさんも、たくさん勉強をして、今度は、このバトンを世界中の困っている人たちに返してあげられるような大人になってください。

原子力発電所の事故に対して、危険をかえりみずに立ち向かう消防士さんや自衛官、電力会社の人たちの姿。各地の被災地で救命救急活動に当たった警察官やお医者さん、看護師さん、そして何より、本当に命がけでみなさんを守ってくれた学校の先生たちの姿を忘れないでください。みなさんも、もっともっと身体を鍛え、判断力を養い、やさしい心（を育て、他人のために働ける人になってください。

私たちも、全国の学校の先生方も、みなさんが笑顔で登校できるように、全力でみなさんを支えます。日本の未来は、みなさんにかかっています。みなさんの明るい笑顔で、日本を元気にしてください。

## 中学校、高等学校段階の生徒用

新学期を迎える皆さんへ

皆さん、入学、進級おめでとうございます。

皆さんは、この4月、希望に満ちた春を迎えるはずでした。

しかし、この春は、私たちにとって、とてもつらい春になってしまいました。

御存じのように、3月11日、あの未曾有の大地震と津波が日本を襲ったのです。

皆さんの中にも、ご家族を亡くされたり、あるいはいまも避難所から学校に通ったりしている生徒さんがいることでしょう。

避難所の中では、皆さんが率先して、お年寄りや身体の不自由な方を助け、掃除をしたり、食事の準備をしたりしてくれているという話をたくさん聞いています。皆さんがボランティアで活躍しているという知らせも、たくさん届いています。本当にありがとうございます。

直接被災をした皆さん。皆さんは、十代のもっとも人間が成長する時期に、この大きな試練に立ち向かわなければならなくなりました。

いま抱えているすべての悲しみや不安から、完全に逃れることはできないかもしれませんが。でもいつか、皆さんが、その悲しみと向き合えるようになる日まで、学業やスポーツ、芸術文化活動やボランティア活動など、何か一つでも夢中になれるものを見つけて、この苦しい時期を乗り越えていってもらえればと願います。

学校は、あらゆる面で、皆さんが、この逆境を乗り越えていくためのサポートをしています。

災害にあわなかった地域の生徒の皆さんにも、お願いがあります。

どうか、皆さんの学校にやってくる、避難してきた仲間たちを温かく迎えてあげてください。すぐ近くに、そういった友達がいないくても、遠く離れて不自由な生活をしている同世代の友達を、同じ仲間、友達だと思ってください。そして、被害を受けた仲間の声に耳を澄ましてください。

この大震災を通じて、日本国と日本社会は、大きな変化を余儀なくされます。この大震

災からどうやって国を立て直していくのか。自然と共生して生きてきたはずの日本社会が、その本来の姿を取り戻すためには何が必要なのか。

もちろん復興の過程では、「がんばろう」という元気なかけ声が必要です。しかし、それと同時に、新しい社会、新しい人間の絆（きずな）を作っていくために、大きな声にかき消されがちになる、弱き声、小さな物音にも耳を澄ましてほしいのです。

東北が生んだ詩人宮沢賢治は、科学と宗教と芸術の力で、冷害・凶作の多かったこの東北地方の農民を、少しでも幸せにしようと考え、そのことに一生を捧げました。

どうか、他人の意見もきちんと受け止めながら、自分で合理的な判断ができる冷静な知性を身に付けてください。しかしそれだけではなく、他人のために祈り涙する、温かい心も育んでください。そして、芸術やスポーツで人生を楽しむことも忘れないでください。

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』には、こんな言葉があります。

「僕、もうあんな暗やみの中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んでいこう」

賢治の言う「ほんとうのさいわい」とは何でしょう。この大きな災害と混乱の中で、皆さんに、このことを考えて欲しいのです。

もしも、それを皆さんが本当に真剣に考えてくれるなら、きっと皆さんは、どこまでもどこまでも、一緒に進んでいけるはずです。そしてその先には、もっともっと素晴らしい新しい日本の国の姿があるはずです。

忘れないでください。一緒に進んでいくのは、決して日本人だけではありません。今回の東日本大震災では、世界中からたくさんの支援が寄せられています。また、この非常時にあっても秩序正しく、理性を失わない日本人の姿に、世界中が驚き賞賛の声を揚げました。私たちは、世界と共にいます。原子力発電所の事故に対して、危険をかえりみずに立ち向かう消防士や自衛官、電力会社の人たちの姿。各地の被災地で、救命救急活動にあたった警察官や医療関係者、そして何より、本当に命がけで皆さんを守ってくれた学校の先生たちの姿を忘れないでください。そして、みなさんも、もっともっと身体を鍛え、判断力を養い、優しい心を育て、他人のために働ける人になってください。

日本の未来は、皆さんの双肩にかかっています。

あなたたちのその笑顔、ひたむきな表情が、いま家族や地域の人々を支えようと懸命にがんばっている大人たちに、勇気と希望を与えています。 私たちも、全力で、皆さんの支援に取り組みます。

本当の幸せを求めて、一緒に歩いていきましょう。

内閣総理大臣 菅 直人  
文部科学大臣 高木 義明

## 1カ月後の震度6強、震源は陸寄りか ひずんだ地殻「数年は注意を」

産経新聞 2011年4月8日

宮城県沖で7日深夜に起きたマグニチュード（M）7.4の地震は、東日本大震災で最大級の余震となった。揺れの大きさが震度6強と余震で最大となったのは、これまでの余震と比べて震源が陸寄りだったためだ。本震の約1カ月後に起きた大規模な余震は、M9.0を記録した本震のエネルギーがいかに巨大だったかを物語っている。

巨大地震の余震活動は、岩手県沖から茨城県沖の広い範囲で継続しており、7日朝までにM7以上は3回、M6以上は66回、M5以上は394回を記録した。

M5以上の余震数で見ると、これまで最も多かった北海道東方沖地震（平成6年）の4倍近くに達した。阪神大震災など他の大地震と比べても、規模の大きな余震が非常に多い。

今回の余震は本震直後のM7.7、M7.5に次ぐ3番目の規模で、場所は従来の震源域で発生しており、特殊なものではないが死者や多数のけが人が出ており、依然として警戒が必要だ。

今回の余震は東日本大震災前に30年以内の発生確率が99%と想定されていた宮城県沖地震と規模、震央とも近い。しかし、宮城県沖地震がプレート境界型なのに対し、今回は震源が比較的深い太平洋プレートの内部で起きた可能性が高く、気象庁は宮城県沖地震とは別物とみている。

一方、東日本大震災の巨大地震以降、震源域から遠く離れた場所でも地震活動が活発化しており、長野県北部、静岡県東部、秋田県内陸北部で震度5強以上が相次いだ。巨大地震の影響で内陸の地殻にかかる力が変化し、誘発された地震とみられる。

これらは「広義の余震」とも呼ばれ、今回の巨大地震で特徴的な活動だ。今後もひずみが蓄積された場所などで地震が誘発される可能性があり、専門家は「数年間は注意深く見守る必要がある」としている。

### 要支援者に専門ケアを 京阪神のNPOがプロジェクト 京都新聞 2011年4月8日



避難所の管理者から、高齢者や障害者の現状を聞き取るボランティアたち(宮城県石巻市)

東日本大震災で被災した障害や精神疾患のある人、高齢者ら要支援者を支えようと、京阪神のNPOなどが「被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト」(通称つなプロ、事務局・京都市中京区)を始めた。宮城県の避難所の約半数を調べたところ、統合失調症の男性が孤立している例や、高齢者しかいない避難所の例があったという。要支援者とケアの専門家を結びつけようと

態勢づくりを急いでいる。

京阪神から9団体が参加し、東京都、仙台市の団体も加わっている。要支援者がどの避難所にいて、どんなケアが必要なのかを具体的に把握し、専門家などに「つなぐ」ことを目指す。

3月末から4月2日にかけて宮城県の避難所約260カ所を調査し、高齢者、児童、妊婦、アレルギー患者、障害者などの人数や状態、衛生環境について聞き取った。調査は京阪神と東京の学生ボランティアなど70人が担当し、現在も約100人が手分けして残りの避難所を回っているという。

全国のNPOや専門家と連携し、必要な支援メニューをそろえる作業も始めた。手始めに、摂食障害のある人のための相談員を金沢市から被災地に派遣する。発達障害の子どもの学習支援をしている団体などにも協力を呼び掛けている。

つなプロの事務局長を務めるNPO法人「ユースビジョン」(京都市中京区)代表、赤澤清孝さん(36)は「避難所から死者や生活に困る人を出したくない。NPOの専門性と人脈を生かし、きめ細やかな支援をしていきたい」と専門的なケアのできる人を広く募っている。

問い合わせは、つなプロの小林健司さん携帯電話080(3303)3234。



京都市下京区の公益財団法人「京都地域創造基金」は、つなプロの活動を応援するため「つなプロ基金」を設けた。寄付は▽銀行振込＝京都信用金庫本店 普通2047135▽郵便振替＝ゆうちょ銀行 口座00940-3-304687へ。口座名はいずれも「つなプロ基金」。問い合わせは同基金TEL075(354)8792。

### 被災地に車の列 目立つ渋滞 見物人立ち入りか 河北新報 2011年4月8日

宮城県沿岸部の被災地に向かう幹線道路で渋滞が目立ってきた。ガソリン供給や道路事

情が改善され、通勤通学や自宅確認に車を使う被災者が増加。被災地の見物が目的とみられる一部の車も混雑に拍車を掛けている。

東日本高速道路によると、三陸自動車道利府塩釜—利府中インターチェンジ（IC）間の交通量は週末だった2、3の両日、前年同期比で2～3割増え、6日は5割増の約2万1200台が通行した。仙台東部道路の山元—亘理IC間も3割ほど交通量が増えている。

三陸道の鳴瀬奥松島IC付近は朝夕を中心に激しい渋滞が発生。県警交通規制課によると、亘理町の国道6号や東松島市の国道45号、石巻市蛇田の県道でも渋滞が起きている。

同課は「公共交通機関が完全に機能していないことに加え、ガソリンが比較的入手しやすくなり、移動手段に車を使う人が増えた」とみる。

県警は渋滞が捜索、復旧活動の妨げにもなりかねないと判断。県トラック協会や県レンタカー協会など関係9団体にチラシ1200枚を配り、交通量の抑制に協力を求めている。

車で混み合う三陸道の鳴瀬奥松島IC付近＝7日午後7時30分ごろ、東松島市

◎警察検問「復興の妨げ自粛を」

東日本大震災の被災地に「見物人」とみられる人と車が入り込み、緊急車両の通行や行方不明者の捜索活動に支障が出ている。マナー違反の行為も目立ち、自治体や警察は良識ある行動を求めている。

津波で沿岸部が壊滅的被害を受けた宮城県亘理町。町災害対策本部の関係者は「3月末から町民以外と思われる人が増えている」と明かす。路上駐車して壊れた堤防などの風景や捜索、がれき撤去活動の様子を撮影する姿が目立つという。

車の擦れ違いの妨げになり、町は6日に一部地区で通行制限を開始した。自宅に向かう町民には通行許可証を発行している。町は「通行制限の人員を配置する余裕は本来ない。興味本位で見に来るのは遠慮してほしい」と話す。

津波被害が甚大な仙台市若林区荒浜に続く県道でも警察の検問が始まった。県道はがれきの撤去作業が進んで海岸線まで開通し、一般車が増加した。住民の車、緊急車両以外で進入する人は身分証の提示を求められることがある。

「見物人」の中にはごみを捨てて帰ったり、遺体の写真を撮ろうとしたりする人も。県警は「被災地では今もライフラインの復旧作業や捜索活動、救援物資の搬入が続いている。一刻も早い復興のため、不要不急の車の乗り入れは自粛してほしい」と呼び掛けている。



## 避難転々 鴨川で新生活【千葉】



も鴨川市に移って来る予定で、施設機能の大半を移転させるという。（福原康哲）

同法人は福島県内から重度の知的障害のある子どもや大人を受け入れている施設を二十

東京新聞 2011年4月7日

鴨川青年の家に移り、入所者同士はゆっくり歓談＝鴨川市で

東京電力福島第一原発事故のため、避難先を転々としていた福島県富岡町の社会福祉法人「福島県福祉事業協会」が運営する障害者支援施設「あぶくま更生園」の入所者ら百十四人が五日、鴨川市の県立鴨川青年の家（諸岡研所長）に移動した。七日も同法人系列の知的障害者施設「東洋学園」の入所者九十五人、十一日にも同じ系列施設の入所者六十八人が移る。また、十一日までに各施設の職員九十六人も



四カ所運営。そのうち、第一原発と第二原発の五～十キロ圏内に東洋学園など十四施設を持つ。震災翌日の三月十二日に出た避難指示で、入所者を同県川内村のあぶくま更生園に避難させたが、その日の夜に避難指示が拡大。同村の小学校体育館に入所者二百人近くを移動させた。

ほかの避難者と一晩過ごしたが、突然の環境変化に落ち着きを失うなどする入所者が続出。十三日には同県田村市の法人が所有する施設に移った。しかし、定員四十人と手狭だったため入所者と職員は不自由な生活を強いられ、新たな移転先を探していた。

これを知った鴨川市の亀田総合病院（亀田信介院長）が、同市に入所者受け入れのバックアップを要請。さらに、市も県に青年の家の提供を申し入れ、受け入れが実現した。

青年の家の宿泊定員は三百六十人。避難する施設の入所者だけでも二百七十人を超えるため、青年の家では今年六月までの宿泊予約を断るなどして急きょ間に合わせたという。

鴨川市では「県教委から青年の家の使用許可をいただき、入所者を受け入れることができた。感謝している」と話している。

### 善意積んだトラック、何度も被災地へ 桑名の解体業者 朝日新聞 2011年4月8日



重症心身障害児施設に発電機用の軽油と暖房用の灯油を運び込む伊藤友彦さん（左）＝仙台市青葉区芋沢、難民を助ける会提供

桑名市長島町の解体業「高野興業」が、トラックで東日本大震災の被災地で不足している燃料などを現地へ届け続けている。

3月15日朝、高野泰宏社長（45）が会員になっているNPO法人「難民を助ける会」（東京都）から「東京では救援物資が手に入らないので助けてほしい」と電話があった。

すぐに灯油や軽油のほか、水や食料を集め、

16日早朝、社長の弟で工事部長の隆志さん（43）と社員の伊藤友彦さん（26）がそれぞれ同社のトラックで仙台市に向かった。

伊藤さんは、病院や障害者施設に燃料を届けた。燃料が底をついていた施設の職員からは「これで何人かの命が救われる」と喜ばれたという。伊藤さんは「その言葉で力が湧いた。行く前は原発や余震で不安だったけど行って良かった」と話した。

伊藤さんは計3回燃料を運び、3回目には津波で壊滅した地域も通った。「あまりの被害に、かわいそうと思う前に『日本じゃないみたい』と思った」。1日夜、同社は4回目となる燃料を運搬。7日には、福島県相馬市から要望があった高压洗浄機などを同市に運び、寄付した。

隆志さんは物資を運搬後、難民を助ける会の物資を運ぶため東京と仙台市を3往復した。3月25日には高野社長も仙台市に物資を届けた。高野社長は「復興までにはまだ時間がかかる。これからも継続的に支援を続ける」と話した。（姫野直行）

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行